

徒然の記 その十

代用ランプ

物置の戸口を開け放しておくのは不用心でしたし、夜風が入るので、夕方になると引き戸を閉め切りました。

真っ暗な中では、何も出来ませんので明かりの火を灯しましたが、それは、ロウソクでも、ランプでもありませんでした。

無い無い尽くしの中でのともし火は、ビール瓶(びん)を使ったランプの代用品でした。

…神棚の燈明皿と同じ原理のきわめて原始的な照明装置でしたが、仕組みは次のようになっています。

ビール壺の底の方に油を入れ、細く裂いた紐状の布切を芯に使っていましたが、壺の口から芯を中に押し込んで油に浸しますと、毛細管現象で、油が吸い上げられてきます。

芯はいつも壺の口から少し外に垂らしておいて火をつけて燃やののですが、出し入れが思い通りにいかず、火加減(ひかげん)することが出来ませんでした。

もちろん、火を覆うホヤなどはありません。

時々、外に垂らした部分が燃え尽きて、火のついたまま芯が瓶の油の中へ落ちることがありました。

それでも、瓶の口が狭くて外から空気が十分補給されないので、中は酸欠となり、火はすぐ消えてしまいました。

…幼かったので、そうした理屈はわかりませんでしたので、底の油に火がついて瓶が爆発するのではないかとすごく心配でした。

この代用ランプは、東京の葛飾に戻ってからもしばらく活躍していました。

その頃は、電力事情が悪く、しばしば停電したからです。

山小屋の煤けた梁から吊り下げられたランプは絵になりますが、ビール瓶の代用ランプではさまになりません。

しかし、わたしは、耐乏生活を象徴するこの代用ランプに、山小屋のランプ以上に心が惹かれます。